

看護学生の大学生生活満足の探索的検討

- ¹⁾ 鳥取大学医学部保健学科 地域・精神看護学講座 (主任 吉岡伸一教授)
²⁾ 岡山大学大学院保健学研究科

仁科祐子¹⁾, 谷垣静子²⁾, 乗越千枝²⁾

Factors relating to Satisfaction with University Life in nursing students

Yuko NISHINA¹⁾, Shizuko TANIGAKI²⁾, Chie NORIKOSHI²⁾

- ¹⁾ *Department of Nursing Care Environment and Mental Health, School of Health Science,
Faculty of Medicine, Tottori University, Yonago 683-8503, Japan*
²⁾ *Graduate School of Health Sciences, Okayama University, Okayama 700-8558, Japan*

ABSTRACT

The purpose of the present study was to investigate factors relating to satisfaction with university life and clarify the relationships between the factors and social skills in nursing students. The participants were all volunteers, invited from a class of 3rd year nursing students. Ninety students participated in the study. A questionnaire about i) satisfaction with university life (15 statements), ii) Kikuchi's Scale of Social Skills; 18 items and iii) overall satisfaction with university life was delivered to nursing students in 2011. They completed the questionnaire. Factor analysis and correlation coefficient were used. As a result, 'Learning Surroundings', 'Standard of Living' and 'Self-Motivating States' were revealed as factors relating to satisfaction with university life. Of these three factors, self-motivating states had a correlation to social skills. It is estimated that social skill training can enhance self-motivated states in nursing students.
(Accepted on August 5, 2013)

Key words : nursing students, satisfaction with university life, social skills, self-motivation

はじめに

これまでの大学生を対象とした調査研究において、大学生のコミュニケーション力と自尊感情とは相関関係にある¹⁾、大学生の社会的スキルと孤独感や憂鬱、大学生生活不安との間には負の相関関係がある²⁾ことが明らかにされており、大学生のコミュニケーションスキルとメンタルヘルスとの

関連が示唆されている。我々は学生のメンタルヘルスの評価指標として自尊感情や大学生生活満足度に着目し、看護学生のメンタルヘルスとコミュニケーションスキルとの関連を調査してきた^{3,4)}。2010年の調査において、「自尊感情」と「大学生生活満足度」は社会的スキルとの関連がみられた³⁾。しかしこの時の「大学生生活満足度」は、「大学生生活全般に対してどの程度満足しているか」という

表1 対象者の基本属性, 社会的スキルと大学生生活満足度の平均値

	2005年 (n = 90)	2011年 (n = 85)
平均年齢 (歳)	21.2 (SD: 0.9)	21.1 (SD: 0.8)
性別		
男性	5人 (5.6%)	9人 (10.6%)
女性	85人 (94.4%)	76人 (89.4%)
社会的スキル (18項目) (点)	56.2 (SD: 8.8)	54.4 (SD: 8.8)
大学生生活満足度 (1項目) (点)	2.8 (SD: 0.7)	2.8 (SD: 0.5)

全体的な満足感を問うものであった。我々は大学生のコミュニケーションスキル向上プログラムの評価指標として、メンタルヘルスのポジティブな側面である大学生生活満足度が適切だと考えている。しかしこれまで、看護学生の大学生生活満足度についての系統的な調査研究は行われておらず、実態が明らかでない。そこで本研究では、まず、我々が独自に作成した大学生生活満足度調査票を用いて看護学生の大学生生活満足度の現状を明らかにする。次に、看護学生の大学生生活満足度の潜在的因子構造を明らかにする。最後に、大学生生活満足度の潜在因子と社会的スキルとの関連を明らかにし、社会的スキル等のコミュニケーションスキル向上プログラムのメンタルヘルスへの効果可能性について検討したい。

研究方法

1. 対象と調査実施手順

2011年に、A大学看護学3年生90名を対象として、無記名自記式質問紙調査を実施した。対象者全員に一齐に説明書と調査用紙を配布し、口頭で説明を行った。本研究の趣旨に同意する者はその場で調査用紙への回答を依頼し、回収した。

2. 調査内容

- 1) 大学生生活満足度調査票 (15項目)：我々の先行研究^{3,4)}や先行文献⁵⁻⁷⁾を参考にして調査項目を構成した。「人との関係」に関する3項目、「学業」に関する5項目、「学業以外」に関する7項目の計15項目とした。各項目に対して「不満足」～「非常に満足」の4件法で、得点が高いほど満足していると評価した。また、大学生生活全体への満足度に影響する優先順位の高い5項目を、15項目の中から複数回答で選択してもらった。
- 2) 大学生生活満足度 (1項目)：大学生生活全体に対してどの程度満足しているか、「不満足」～「非

常に満足」の4件法で、得点が高いほど満足していると評価した。

- 3) 社会的スキル尺度 (18項目)：菊池⁸⁾が開発し主に日本国内で使用され、信頼性・妥当性が検証されているKikuchi's Scale of Social Skills; 18items (KiSS-18)を用いた。5件法で得点分布は18～90である。高得点ほど社会的スキルが高いと評価した。

3. 分析方法

まず、大学生生活満足度の現状を明らかにするために、大学生生活満足度調査票の基礎統計量を算出した。次に、大学生生活満足度の潜在的因子構造を明らかにするために因子分析 (最尤法, プロマックス回転)を行い、負荷量の低い2項目を削除後、再度因子分析を行った。最終的に3因子を抽出し、因子得点を算出した。因子名の命名にあたっては、看護教育に携わる研究者と検討を重ねた。最後に、潜在因子と社会的スキルとの関連を明らかにするために、相関分析 (Spearmanの ρ)を行った。

4. 倫理的配慮

対象者の自主的参加意思を尊重すること、個人情報保護の徹底、調査用紙の提出をもって参加意思の確認とすることを説明した。また研究対象者は学生であるため、本研究への参加の有無は成績等には一切関係の無いことを説明した。鳥取大学医学部倫理審査委員会の承認を得て行った。

結 果

1. 対象者の属性, 社会的スキルの平均点 (表1)

85名からの回答が得られた (有効回答率94.4%)。平均年齢は21.1 (SD = 0.8) 歳, 男性9名, 女性76名であった。社会的スキルの平均得点は54.4 (SD = 8.8) 点であった。2005年に看護学生を対象に行った調査⁹⁾における社会的スキルと大学生生活満足度 (1項目) の平均値とあわせて表1

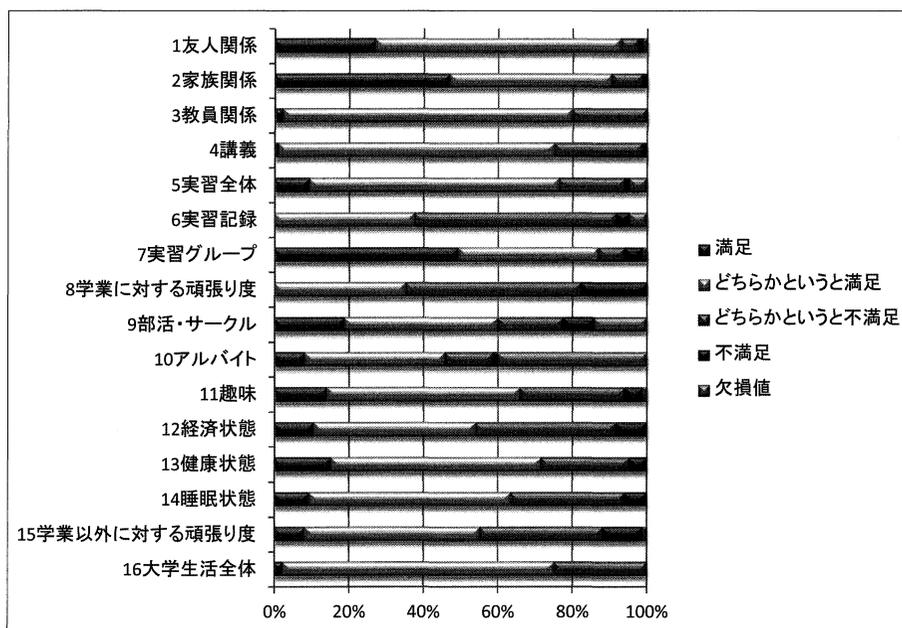


図1 大学生生活満足の現状

表2 大学生生活満足度全体に強く影響する項目

調査項目	n	%
1 友人関係	74	87.1
5 実習全体	45	53.0
9 部活・サークル	45	53.0
14 睡眠	32	37.6
7 実習グループ	31	36.5
2 家族関係	26	30.6
12 経済状態	21	24.7
13 健康状態	21	24.7
11 趣味	20	23.5
10 アルバイト	19	22.4
8 学業頑張り度	16	18.8
4 講義	13	15.3
3 教員関係	10	11.8
6 実習記録	8	9.4
15 学業以外の頑張り度	7	8.2

注) 複数回答 (1人5項目まで)

に示す。

2. 大学生生活満足の現状 (図1, 表2)

「満足」「どちらかという満足」に回答した者が多かった項目は、「友人関係」「家族関係」「実習グループ」であった。「どちらかという不満足」

「不満足」に回答した者が多かった項目は、「学業に対する頑張り度」「実習記録」「アルバイト」であった (図1)。

大学生生活満足度全体に強く影響する項目として多くの学生が選択した項目は、友人関係 (87.1%)、

表3 大学生生活満足度調査票の因子分析結果

	因子		
	学習環境因子	生活基盤因子	自己を高める因子
実習全体	.858	.236	-.003
講義	.602	-.323	.007
実習グループ	.431	.022	-.188
実習記録	.398	.047	.113
友人関係	.345	-.081	.320
健康状態	-.048	.825	.104
睡眠状態	.028	.661	-.144
経済状態	.046	.317	.174
趣味	-.226	-.041	.611
学業頑張り度	-.016	.175	.560
学業以外への頑張り度	.044	.092	.416
教員との関係	.111	-.236	.412
部活・サークル	.105	.154	.225

注. 因子抽出法：最尤法，回転法：プロマックス法

表4 因子相関行列

	学習環境因子	生活基盤因子	自己を高める因子
学業環境因子	1.000	0.101	0.176
生活基盤因子	0.101	1.000	0.174
自己を高める因子	0.176	0.174	1.000

実習全体 (53.0%)，部活・サークル (53.0%)，睡眠 (37.6%)，実習グループ (36.5%) であった (表2)。

3. 大学生生活満足度調査票の因子分析 (表3, 表4)

第1因子は「実習全体」「講義」「実習グループ」「実習記録」「友人関係」で構成され、【学習環境因子】と命名した。第2因子は「健康状態」「睡眠状態」「経済状態」で構成され、【生活基盤因子】と命名した。第3因子は「趣味」「学業頑張り度」「学業以外の頑張り度」「教員との関係」「部活・サークル」で構成され、大学生生活に、より積極的に取り組むために行う内容で構成されていると考え、【自己を高める因子】と命名した (表3)。大学生生活満足度調査票13項目の信頼性係数 (Cronbach's α) は0.602, 各因子間の相関はみられなかった (表4)。

4. 大学生生活満足度の潜在的因子と社会的スキルとの相関 (表5)

社会的スキルと相関がみられたのは、【自己を高める因子】 ($\rho = 0.367, p < 0.01$)，および【生活基盤因子】 ($\rho = 0.297, p < 0.01$) であった。

考 察

1. 社会的スキルと大学生生活満足度の現状について

社会的スキルと大学生生活満足度の平均点は、2005年の調査と比較して社会的スキルは若干低かったが、大学生生活満足度はほぼ同じであった。大学生生活満足度調査票において、「満足」「どちらかという満足」に回答した者が多かった項目をみると、友人関係、家族関係、実習グループなど、人との関係に関する項目であり、学生は大学生生活における人との関係にはある程度満足しているという現状がうかがえた。これまでの調査においても看護学生の友人関係満足度は高い⁵⁾，人間関係のストレスは低い¹⁰⁾ という報告があり、本研究もこれらと同様の結果だと考えられた。

一方で「どちらかという不満足」「不満足」に回答した者が多かった項目をみると、実習記録、学業に対する頑張り度、アルバイトであった。学業に関していえば、実習記録と学業に対する頑張り度に満足していないという結果は、もう少し

表5 大学生生活満足の潜在因子と社会的スキルとの相関

	社会的スキル	p
学業環境因子	0.149	0.188
生活基盤因子	0.297	0.007 **
自己を高める因子	0.367	0.001 **

** : $p < 0.01$

頑張れたかもしれないという思いを反映している可能性や、実習記録が多くて日々に追われ、自分で納得できるほど頑張れなかったという思いを反映している可能性もある。自由記述では、「実習記録に追われて十分な睡眠もとれず、前日をひきずって次の日の実習を迎えることがある」といった内容があった。看護実践を感覚だけに頼らず論理的に学習する能力をつけるために実習記録はある。看護現象を「思考」し、言語化し、第三者に伝えるという能力が必要となる¹¹⁾。学生が実習記録の意味付けを行えるよう支援することが、実習記録を肯定的に捉えるために必要だと考える。

2. 大学生生活満足の潜在的因子構造の検討

因子分析結果より大学生生活満足度の潜在的因子構造は、【学習環境因子】、【生活基盤因子】、【自己を高める因子】の3因子で構成されていた。すなわち大学生生活満足には、学習環境にどの程度満足しているか、日々の生活基盤にどの程度満足しているか、そしてより積極的な大学生活を送るために自己を高めようと努力することにどの程度満足しているか、ということが影響していると考えられた。より良く学業に取り組むためには日々の生活基盤の安定も重要である、そして自分自身を高めようと日々努力することもまた重要である。学生がより充実した満足のいく大学生活を送るために、これらの各側面からの支援が重要であることが、改めて確認できたといえる。

3. 大学生生活満足度を高める【自己を高める因子】への介入可能性について

これらの各因子のうち社会的スキルと相関がみられたのは【自己を高める因子】であった。【自己を高める因子】が高い人ほど社会的スキルがあると解釈することもできる。しかし教育的な介入可能性を考えると、社会的スキルなどのコミュニケーションスキルを高める教育プログラムは、【自己を高める因子】を向上させる効果が期待されると考えられる。その他にも【自己を高める因子】

への介入可能性としては、学業以外の諸活動への参加を呼び掛ける（ボランティア活動、地域の活動、その他学校以外で学習する場の情報提供等）、さらに教員と学生の対話をより多くもつことも重要と考えられる。

4. 本研究の限界と今後の展望

本研究はある一大学での看護学生を対象とした調査であり、看護学生に一般化するには限界がある。今後はより多くの看護学生を対象として調査を行うとともに、自己を高める因子への介入可能性を検討し、それが学習環境にどのように影響するか、そして全体としての大学生生活満足への影響を検討する必要がある。

本研究にご協力下さった看護学専攻学生の皆さまに、心より感謝申し上げます。

本研究は、2010年度学長経費の助成を受けて行った。また、第31回日本看護科学学会学術集会（2011年、高知）での発表に、更なる分析と加筆・修正を加えたものである。

文 献

- 1) 伊藤悦子, 鎌田澄子. 「対話的關係の検討表」を用いた看護学生のコミュニケーション力と自尊感情との関係. 聖母大学紀要 2005; 2: 35-41.
- 2) 和田実. 対人的有能性とソーシャルサポートの関連. 東京学芸大学紀要1部門 1991; 42: 183-195.
- 3) 仁科祐子, 谷垣静子, 乗越千枝, 宮林郁子. 看護学生のコミュニケーションスキルと自尊感情および大学生生活満足度との関連. 日本看護研究学会雑誌 2010; 33 (3): 213.
- 4) 仁科祐子, 谷垣静子, 乗越千枝, 宮林郁子. 看護学生の大学生生活満足度の現状および社会的スキルとの関連. 日本看護研究学会誌 2011; 34 (3): 278.

- 5) 岩田浩子. 看護学生の学生生活に関する意識
職業的社会化に関する要因と学生生活満足
度. 看護教育 1997; **38** (5): 370-375.
- 6) 黒坂知子. 本校学生の学生生活の実態その3
-2005年生と1998年生との比較-. 東京医科
大学看護専門学校紀要 2006; **16** (1) : 1-8.
- 7) 堀家美代子, 滝沢美津子, 北村愛子, 城戸口
親史, 小尾栄子. 看護系大学における学生生
活実態調査 - 学生から見た健康状態と学生生
活 -. Yamanashi Nursing Journal 2007; **5**(2):
53-59.
- 8) 菊池章夫. KiSS-18研究ノート (追補). 岩手
県立大学社会福祉学部紀要 2005; **6** (2): 1-15
(2005年10月追補) .
- 9) 仁科祐子, 谷垣静子, 乗越千枝. 看護学生の
コミュニケーションスキルおよび自尊感情
とメンタルヘルスとの関連. 米子医学雑誌
2010; **61** (3): 67-74.
- 10) 中村和代, 熊井昭彦. 看護学生のストレスに
関する要因分析 ストレス認知・対処方法の
学年比較. 看護教育 1996; **37** (3): 220-225.
- 11) 中西睦子. 方法としての看護過程 成立条件
と限界. 初版, 東京, ゆみる出版. 1995.